# ケアの互酬性における脆弱性の機能

## ――フランスのアソシアシオンによるケア実践の事例から――

大阪大学　樋口麻里

### 1　目的

現代の先進諸国は、社会保障制度と国家の財政との間で緊張関係を抱えている(Rosanvallon 1995=2006)。これは、ケアの社会的需要の高まりとともに、ケアの供給責任を国家が担うことへの懐疑を生じさせている。こうした懐疑に対して、エヴァ・F・キテイは「依存」とケアの授受に基づく互酬的関係性を人間全体の共通項として置くことで、ケアの供給に対する社会的責任の理論的妥当性を訴えた(Kittay 1999)。キテイの議論は、脆弱性が大きい人々へのケアの提供を保障する一方で、こうした人々はケアの供給者に対して「お返し」をする能力がないとされており、かれらが互酬性という社会の連帯からは排除されるという理論的問題を孕んでいた。

そこで、本報告は、依存の程度が大きいとされる重度の精神障がいを抱える人々（以下、精神障がい者とする）への、サードセクターによるケア実践に焦点を当て、ケアの授受のプロセスにおける依存者と依存労働者間の「お返し」について、質的データの分析から明らかにする。

### 2　方法

フランスの南部都市で 2012 年 5 月～2012 年 12 月に実施した、精神障がい者のケアに携わるアソシアシオン（2 か所）と、アソシアシオンと協同する公立の医療機関（1 か所）に勤務するスタッフへの半構造化面接によるインタビューデータおよび、ケア実践の参与観察データを用いて、「ケアの互酬性」に依存者がどのような主体として関わっているのか（あるいは関わっていないのか）を明らかにする。

### 3　結果

アソシアシオンに関わる精神障がい者の多くは、他者との合理的なコミュニケーションの困難という脆弱性により、非常に不安定な生活状態に陥っていた。この脆弱性に対して、アソシアシオンのスタッフらは、自身の活動を社会的なものと位置づけ、「寄り添いのケア」を提供していた。寄り添いのケアは、精神障がい者の人生に対する意欲の再獲得を目的としており、コミュニケーションを基調とした精神障がい者との対個人的ケアと、かれらを他の社会関係と結びつける対社会的ケアから成る、一連のケア行為である。このケアの実践を通してスタッフは、精神障がい者が抱える脆弱性から、社会の価値観と社会システムを反省的に捉える哲学的態度を獲得していた。

### 4　結論

精神障がい者のもつ脆弱性の機能として、キテイの指摘した、ケア提供の社会的責任における正当化に加えて、既存の社会制度全体のあり方を反省的に捉えなおす再帰的機能が見出された。この機能が、依存者と依存労働者の間で間接的な「お返し」として受け渡されることによって、ケアの互酬性という連帯に、依存者はその依存の程度に関わらず、主体として参入する可能性が示唆された。

### 文献

Kittay, Eva Feder, 1999, *Love's Labor：Essays on Women, Equality, and Dependency*. New York, London: Routledge. （＝2010, 岡野八代・牟田和恵監訳,『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』白澤社.）

Rosanvallon, Pierre, 1995, *La Nouvelle Question Sociale：Repenser l'État-Providence*, Paris: Seuil. (=2006, 北垣徹訳,『連帯の新たなる哲学――福祉国家再考』勁草書房.）